

統合情報システム構築から 情報共有による教育水準向上へ

流通経済大学は、実学色の強い社会科学系中堅大学として堅実な実業人の育成を目指して学生を社会に送り出してきました。1998年に統合情報システムの構築を目指した4カ年計画を立て、入試システムから学籍・成績、法人(事務)、教育研究、学習支援と手がけ、2002年3月には完成させようという計画です。基幹業務システムで蓄積されたデータからは、教員や学生が必要な情報を取り出して活用できる情報共有への対応を図ろうとしています。

この4月からは情報システムにグループウェアを連動させた「Ring」(リング:RKUInterchange for Groups)をスタートさせました。学生との交流促進を主目的とする流通経済大学オリジナルの新しい学習環境・キャンパスコミュニティとして注目されています。

4カ年計画の手始めとしての 入試システム

これまで大学におけるコンピュータ活用は、教育研究用計算資源の提供と事務の合理化とがそれぞれ目的を別にして独立して行われてきました。流通経済大学でも、1984年から中型汎用コンピュータを導入以来、主として大型オフコンで事務の合理化を図ってきました。

基幹システムの陳腐化に伴い、1998年からスタートしたのが情報ネットワーク化4カ年計画です。当初からNECソフトがシステム開発に携わったこの計画では、学務や法人事務の合理化とともに、学生中心の特徴ある学習・教育体制の確立を目標に掲げています。最終的には学内の情報はすべて一元的に統合化し、情報共有により情報を有効活用して教育の質の向上を目指しています。

「4カ年計画の出発点は、厳しい時代を私学が生き残っていかなばならないという認識が大前提としてあり、教育の質を上げて学生に対し教育の成果を出していくことが使命となります。それには全学のあらゆる情報をデータベース化して効

果的に集成され、最終目標として学習・教育研究体制を確立することが最大のポイントです」と市川新・総合情報センター長・経済学部教授は語っています。

1998年に、これまでの情報処理センターは総合情報センターに名称が変更・強化され、全学的な統合情報システムの企画立案を始めました。「センターの位置づけとして、積極的に現場担当者を揺り動かすことが重要。現場が目覚め、情報システムが変わることで業務も一変します」と総合情報センターの伊藤征男課長。

大学の情報システムはカリキュラムの一貫性から4年間同じものを運用して、体制が変えられないと規定されています。基本は4年であり、そのスタートとなるのが入試システムです。この入試システムに学籍・成績システムが加わり、さらに下部には法人(事務)システムが、上部には教育・研究システムが円盤状に並んで、統合情報システムが完成すると、市川センター長は説明します。

入試システムは点数が1点でも間違っていると社会問題化し、その開発は信頼性が問われて失敗が許されません。NECソフトでは1998年の7月から開発に取りかかり、



総合情報センター長・経済学部教授 市川新様

11月に本番稼働させました。入試は多様な形態により3月まで数十回にわたり実施されますが、大きな障害もなくシステムを完成させたのです。入試の多様化は、それがミスを招く原因になるという矛盾した状況の中で、ミスゼロの達成はNECソフトに対する評価となり、以後のシステム開発へと結びついています。

学務と教育研究を支援する 2つの主要システム

NECソフトでは、情報システムの構築に当たって、Windows NTをベースとするクライアントサーバシステムで開発し、データベースにはOracleを採用しました。また、確実で柔軟な開発を可能とするために、プロトタイプング手法により、現場を最も熟知しているエンドユーザーに実際に操作してもらい、業務に即した画面となるまで何度も修正を繰り返したことが著しい効果を上げました。

入試システムは、入試の形態が毎年めまぐるしく変更しているため、システムに

対する細かなフォローにより対応しています。規模の大きい学籍システムの開発には、業務フロー作成、仕様決定、プロトタイプ画面確認など完成までに延べ70回以上の打ち合わせを実施し、エンドユーザー



総合情報センター・情報システム課長 伊藤 征男 様

の希望通りのシステムを構築することに成功しました。学籍システムには、学生に対する手厚いサービスなど流通経済大学の独自の固有機能となるシステムが数多く含まれています。パソコン教室は、学生が自由に利用できる環境を整えるために、メールサーバやWWWサーバのOSには、NECソフトで実績のあるLinuxを提案し採用いただきました。学生全員がいつでもパソコンを使える体制を支えているのが学籍システムです。学生の学籍データを活用することで全員のパソコン利用が可能となり、それまで希望制で学生番号を聞いて手入力して登録する一斉作業がなくなりました。

オリジナルの新しい 学生サービス「Ring」

キャンパスコミュニティ「Ring」は、インターネットやメールに加え、時間割や休講補講など「授業履修情報」や「呼び出し情報」などが学生に提供されるとともに、同じゼミのメンバーで様々な情報を共有することができます。学生個人に

対する情報提供を行う学生サービスと、学生と教員とがコミュニケーションを行う仕組みです。他大学の個々の教員による取組みとは異なり、私学では全員ゼミ制のもとに全学を通じてはおそらく初めての流通経済大学オリジナルな試みとして注目されています。携帯電話向け情報提供サービスも開始しました。

「インターネットはコミュニケーションのメディアであり、インターネットによる学生サービスがポイントになります。独立したシステムをインターネットで統合していき、あらゆるメディアを使って情報提供していかざるを得ません。学生との距離感をできるだけ小さくしていく個別対応により、face to faceの場を設けていくことが重要です。遠隔交流を可能にするITと、どう整合性をとっていくかがポイント」(市川センター長)

「入口(入試)から出口(卒業)までとして、入口としての入試システムをまず手がけ、それが学籍や教育研究まで連携していったわけです。扱っているデータが



そのまま学生サービスにつながるようにすることが必要で、学生の目に見える形で情報を提供していきたい(伊藤課長)

総合情報センターには、企業での業務経験と専門知識のある女性のインストラクター3名が学生の相談に乗り、利用の手助けを行って学生から高い評価を得ています。学内のシステムはデータが繋がっていますが、まだ使い方としてデー

タの共有化が十分になされているわけではありません。学生と職員、教員の情報共有を一層図っていくことが必要です。「学生のケアができるきめ細かなシステムがますます重要で、学生サービスを教育へフィードバックすることが重要です。生のデータを教育にフィードバックしないとデータが生きてこない(伊藤課長)

Ringは学生向けのグループウェアであり、教職員向けのグループウェアの開発も課題になっており、柔軟性があって付加価値の高いシステム活用が求められています。総合情報センターは、IT体制を整えていく戦略立場を強めざるを得ず、対外的な責任も大きくなっています。情報システムの使命は、ますます高まっているといえるでしょう。

システムをサポートして

NECソフト(株)
北関東支社茨城システムセンター主任
堀川 竜夫



4年計画における最初の入試システムの開発は失敗が許されない中で全力で取り組み、軌道に乗せることができました。次いで学籍システム、教育研究と学習の支援システムに関わり、さらに細かなシステムにつないでいく仕上げを行っている最中です。大きな障害もなく、順調に今日に至っているのは、エンドユーザーと直接交渉し、目に見える形で提案していったことが評価されているようです。データの一元管理による情報共有を目標に統合情報システムの集大成を図るために、地の利を活かして最大限のフォローを続けていきたいと思っています。